

論文審査結果の要旨

本論文については、2026年2月19日午前10時から12時にわたり、京都府立大学文学部会議室で開催した博士論文公開審査会において内容説明がなされ、その後質疑応答が行われた。公開審査会で提出された主な論点は、以下のとおりである。

- ①「成立」とは何を意味するか。
- ②先行研究が相互に矛盾している原因について。
- ③甲戌本と己卯本・庚辰本の異同の分布と成立過程の関係について。
- ④『水滸伝』『金瓶梅』と『紅樓夢』の関係について。
- ⑤批評が地の文に取り込まれる過程について。
- ⑥己卯本・庚辰本に共通する底本の位置づけについて。
- ⑦「金陵十二釵」稿の位置づけについて。

以上の論点について、質疑を行い、基本的に適切な認識を有していることが確認された。

①については、複数の稿本・写本の段階を経て改変・整理が重ねられ、最終的に刊本として刊行されるまでの生成過程全体を指す。②については、従来の研究が部分的なテキストの異同に基づいて説を立てていることが主な原因と考えられる。これを解決するため、本論文では主要写本の全面的校勘を行っている。③については異同の分布状況がテキスト成立過程の各段階と対応している可能性が認められる。特に第五回から第十五回における相違は、いわゆる「風月宝鑑」の内容が増補された稿本の段階を反映していることを示唆するものであり、今後さらに精査したい。④⑤については、『水滸伝』『金瓶梅』の文体や形式が『紅樓夢』、ならびに白話小説全般に及ぼした影響を具体的に論じる必要がある。先行研究をふまえたうえで、自説との関連を明確に示すことを今後の課題としたい。⑥については、従来の研究では両本に共通する底本の存在が想定されてこなかった。これを仮定することにより、『紅樓夢』テキストの成立に関する様々な問題を解決しようと考えている。⑦については、初期稿本の一段階を示すものと位置づけられる、との回答がなされた。

本研究が、主要写本の校勘を全面的に実施し、その結果、成立時期が早いことをもって後続テキストの基礎となるものと考えられていた己卯本・庚辰本について、そこで施された改変の多くが後の写本に受け継がれていないことを明らかにしたことは、『紅樓夢』テキスト研究における画期的な業績であり、従来の研究がなぜ相互に矛盾した結果になったのかという原因をも説明しうるものである。

また、金聖歎本『水滸伝』・張竹坡本『金瓶梅』との比較から、創作に当たって行われた試行錯誤の過程を浮き彫りにし、更に批評に当たる要素が本文に取り込まれて、白話小説のスタイルに革命的变化を起こす過程を実証した。このことは、稿本の存在が稀である古典文学研究において、通常は困難である生成論的研究のすぐれた成果であるとともに、中国白話小説が近代文学へと接近していく過程を具体的に示した事例として重要な意義を有する。

更に、刊行に当たって付加されたと見られる後の四十回と、曹雪芹の手になる前の八十回に、文体・形式などの相違が存在することを実証的に示した点は、後の四十回が別人による後補であることを証明するとともに、前の八十回の独創性を具体的に提示したものとして高く評価される。

以上のように、本論文は実証的手続に基づいて『紅樓夢』研究に新たな地平を開いたものであり、文学研究科の定める博士学位論文審査における評価基準を満たしているものと判断される。よって本委員会は、本論文が博士(文学)の学位を授与するに値することを認める。